

APIR Commentary No.4

— 研究成果の見える化 ～代表理事としての思い～ —

当研究所の代表理事を拝命してから約半年が経過した。その前8年弱、関西電力の研究開発室で技術研究、技術開発に携わってきたが、社会、経済、政策といった社会科学系の当研究所の調査・研究は初めての世界であり、中には一般常識として理解できるところもあるが、やはり難解な事柄が多く、大いに勉強しなければならぬと感じている。

当研究所はネットワーク型の研究所として、個々の領域で著名な権威ある先生方に調査・研究をリードしていただき、価値ある成果を上げて発信していかねばならない。一方で、それにふさわしい評価がなされるかどうか、相応の認知度を得られるかどうか。その鍵は世間一般に分かりやすい形で発信できるかどうか、にかかっていると思う。

技術開発、製品開発では成果物として物が出来上がったり、製品が世に出たりして目に見えやすいが、社会科学系の調査・研究の成果を目に見える形で表現するのはむずかしいように思う。

技術研究の中でもいろんな現象を再現したり予測したりするシミュレーション研究は、実際に物が出来上がる訳ではないから、計算結果としての数表を羅列しても一般の人にはわからない。それを理解してもらうためには、その結果がどういうことを表しているのかをわかりやすく加工することが求められる。すぐに思いつくのはグラフ化であり、グラフがあるだけでわかりやすさは格段にアップする。現象として現れるものはコンピューター・グラフィックを用いるなどして目に見える形で表現することも有効だろう。

以前に横浜にある地球シミュレータセンターを見せていただいたことがある。ズラッと並んだコンピューター群を見て、その計算能力の高さ、処理能力の速さは当時世界一で、これで地球環境予測や台風の分析などが高精度で行える、という説明を聞いて大いに感心した。が、そこの設備の中で一番印象に残ったのは、あるブースの中に特殊なメガネをかけて入ると、台風の中がどうなっているかが実際に台風の中に入ったかのように見ることのできる3Dのバーチャルリアリティ技術で、分析結果、計算結果を目に見える形で表現した素晴らしい事例であった。

このような成果の見える化を、社会科学の分野でも行われるシミュレーションの結果などについても実現できないだろうか、というのが今の私の関心事である。ある分野、領域の専門家の先生方のやり取りを横で聞いていてもわからないことが多い。自分の知識のなさもあるが、専門用語が飛び交う議論にはいちいちウィキペディアが必要である。調査・研究で得られた成果や権威ある人たちの論文を咀嚼して、一般の人たちが見てわかるような形で発信していくこと、これが世の中に数あるシンクタンクに共通の課題であり、我々APIRにとっても大きな役割のひとつだと考えている。

<代表理事 岩城吉信, contact@apir.or.jp, 06-6441-5750>

・本レポートは、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
・本レポートは信頼できるとされる各種データに基づいて作成されていますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。また、記載された内容は、今後予告なしに変更されることがあります。